『平城京一三〇〇年全検証―奈良の都を木簡からよみ解く』正誤表

目次

第三章第六節　伝票からみた奈良時代の生活→深遠なる伝票木簡の世界

年表

24行　七二七（神亀）三年→七二七（神亀）四年

25行　七二八（神亀）四年→七二七（神亀）五年

凡例

（1）木簡は内容分類によって、文書、付札、その他の順に配列するのを原則とした。→（削除）

第一章　平城京に旅立つ前に

7頁2行　夕日にも→夕日に

7頁19行　文字史料→文字資料

11頁地図　下図に差し替え（赤色網掛けを一つ東のブロックに移す）

11頁下段図キャプション　沙金桂心請文→桂心請文

13頁▼9　藤原時平と菅原道真→藤原時平、続いて菅原道真

13頁13行　恭仁京→恭仁宮

14頁21行　下図（脱落）

15頁3行　七百五十メートル→二百五十メートル

15頁17行　史蹟に指定された。→史蹟に指定された。現在の第二次大極殿・東区朝堂院である。

17頁14・15行　それ以上でも以下でもない→（削除）

21頁▼18　帳簿がつくられた。→帳簿がつくられた時期がある。

22頁▼21　ここに→木口に

28頁10行　これはそのうちの一点、→これは

28頁17行　大王家の直轄領を「ミヤケ」、在地豪族の支配単位を「コホリ」としたのである。→大王家の直轄領「ミヤケ」や在地豪族の支配単位を「コホリ」としたのである。

30頁3行　韓国南部→韓国南西部

31頁21行　百済は滅亡→百済は完全に滅亡

33頁写真キャプション　南上空から見た平城宮の俯瞰図→南から、朱雀門・朝堂院・第一次大極殿（復原前）が連なる中央区。

第二章　平城京への道、伝統と革新の弁証法

38頁9行　（下図参照）→（41頁右図参照）

40頁下段左図キャプション　『日中古代都構造の研究』→『日中古代宮都構造の研究』

42頁1行　藤原京の東四坊大路→藤原京の東二坊大路

44頁20・21行　下図参照→下写真参照

54頁22行　多い→多いといわれる。
55頁22行　一次資料→一次史料
58頁▼8　真従の娘である→真従の妻だった
　連座した咎で→連座し
　流罪となった。→移された。
58頁右図キャプション追加　網掛け部分は既調査地。一九五頁の奈良時代後半の平城宮を参照のこと。
61頁15行　太政官らを→議政官を
61頁右写真　東院庭園→復原整備された東院庭園
62頁7・8行　井上和人氏（奈良文化財研究所）の研究によると、→（削除）
62頁図右　平城宮南面大垣→平城宮東院の南面大垣
64頁8行　出御のルビ　しゅつご→しゅつぎょ
66頁17行　三月→三月（題詞には二月とあるが、遷都の時とすれば三月か）

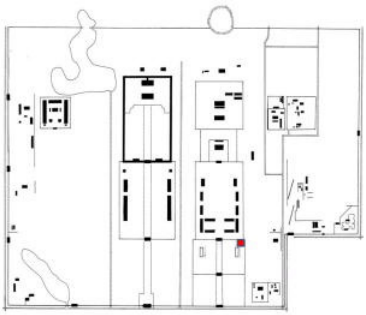
第三章　長屋王家木簡の発見、貴族たちの知られざる日常

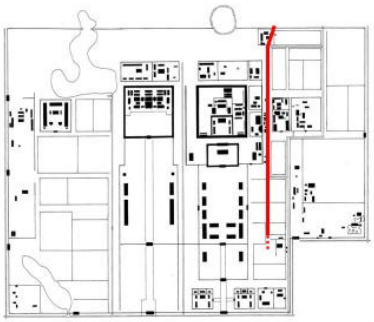
73頁タイトル　長屋王家木簡の発見とその周辺→長屋王家木簡の発見、貴族たちの知られざる日常
75頁2行　式部卿→式部省
75頁15行　国司観察制度→国司監察制度
75頁柱　長屋王家木簡の発見とその周辺→長屋王家木簡の発見、貴族たちの知られざる日常（以下本章の柱、全て誤り）
76頁21行　天武天皇の子→文武天皇の子
79頁▼3　漢和辞典→百科辞典
85頁2行　「長屋王家政所」→「長屋王家政所（まんどころ）」（ルビを追加）
95頁9行　太政大臣を任じられ→太政大臣に任じられ
109頁地図キャプション　唯一、奈良時代の遺跡が保存されている→唯一発掘調査で見つかった奈良時代の遺跡が保存されている
109頁2行　開発にともなう開発に伴う→開発にともなう
114頁図右キャプション　藤原麻呂邸とみられる→離宮とみられる（下の区画）→（削除）周辺図→遺構図
115頁4行　（二つ目の）▼11→（削除）
115頁13行　右大臣として→（削除）
117頁13行　きょうなん→けいなん（ルビを訂正）

第四章　官僚社会の発展、聖武即位前夜の宮城の姿

121頁タイトル　聖武の即位と平城宮→官僚社会の発展、聖武即位前夜の宮城の姿
123頁2行　内裏の南門→内裏の南面
123頁5行　築地回廊→築地塀（二ヵ所あり）
123頁柱　聖武の即位と平城宮→官僚社会の発展、聖武即位前夜の宮城の姿（以下本章の柱、全て誤り）
124頁13行　それが、→（削除）
127頁11行　百二十日以上→百四十日以上
127頁18行　大臣や納言ら「太政官」に→太政官に
135頁2行　SD一一六四〇やSD一一六〇〇
136頁4行　荷札→付札
136頁写真キャプション　「鹿宍」木簡斜め写真（4-10）
137頁6・7行　右ページの写真→下の写真
141頁図右キャプション追加　（正倉院宝物）

142頁14行　特別史跡→史蹟
142頁20行　特別史跡→史蹟
146頁13行　下図（脱落）
147頁2行　大・→大口
156頁11行　朝集殿南門→朝集殿院南門
156頁15行　南或→南闈
158頁9行　文字資料としての→確かに文字資料としての
159頁7行　B→B
159頁上段地図　下図右に差し替え（朝集殿院北東隅の位置誤り）
160頁図右キャプション　式部省正殿→奈良時代後半の式部省正殿
161頁上段地図キャプション　奈良時代後半、東区朝堂院のの東に官衙地区が設けられ、その真ん中を→東区朝堂院の東に設けられた官衙地区の真ん中を
161頁上段地図　下図左に差し替え（SD二七〇〇の行方）
162頁15行　e→[五]
165頁キャプション　『雑集』第十五紙→聖武天皇宸翰『雑集』第十五紙（正倉院宝物）
166頁1行　東区北端→東区北部
171頁7行　第九節奈良時代の酒づくりは役所にて→造酒司、酒づくりが仕事の羨ましい役所





171頁図右キャプション　位置関係面→位置関係図
174頁図中キャプション追加　「酒司□／造酒」
176頁21行　平安時代の→平安宮の

第五章　二条大路木簡の発見、聖武と光明の精神世界への入り口

184頁22行　相撲節会　ルビ　すもうのせちえ→すまいのせちえ
184頁23行　花と葉の落ち切った→花の落ち切った
185頁上段地図キャプション　（東区大極殿院）→（削除）
186頁▼10　七五一年（天平勝宝三）→七五二年（天平勝宝四）
187頁11・12行　袋そのものにたいする→文字にたいする
189頁図キャプション　楼閣山水之図
190頁図キャプション　造山房司長官に→造山房司長官に任じる
193頁図キャプション追加　（提供・名古屋市蓬左文庫）
195頁図キャプション　●●●頁→五八頁
195頁▼13　築地塀で→区画施設で
196頁図キャプション　文化財建造物保存教会→文化財建造物保存協会
198・199頁キャプション追加　金光明最勝王経（提供・奈良国立博物館）
201頁9行　朝堂院→中央区朝堂院
201頁14行　大極殿院が→大極殿院・朝堂院が
211頁図右キャプション　5-17→（削除）
211頁図左キャプション　5-18→5-17
213頁3行　中宮資人→中宮舎人
224頁7行　四束→四把
233頁21行　軒丸瓦六二八五A—軒平瓦六七二一→軒丸瓦六二八二—軒平瓦六七二一
234頁3行　第三節→第五節

236頁23行　やや不自然だ。→やや不自然だ。▼35

237頁13行　□櫃→□〔羹カ〕櫃

237頁地図キャプション　氷が届けた→氷を届けた

240頁▼38　知五衛と授刀舎人をを兼ねて→知五衛并授刀舎人事を兼ねて

240頁▼39　新田部天皇→新田部親王

240頁図キャプション　**5-38 → 5-39**

242頁19行　藤原宮子→藤原宮子▼40

第六章　遷都の日々、衆生救済へのみはてぬ夢

245頁タイトル　遷都の日々、律令国家完成への道→遷都の日々、衆生救済へのみはてぬ夢

247頁10行　紫香楽宮に→紫香楽に

247頁柱　遷都の日々、律令国家完成への道→遷都の日々、衆生救済へのみはてぬ夢（以下本章の柱、全て誤り）

248頁11行　県犬養橘三千代　ルビ　あがたいぬかいのたちばなのすくね→あがたいぬかいのたちばなのみちよ

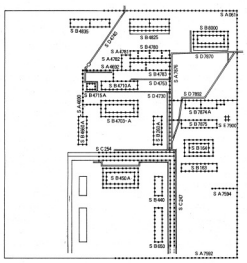
249頁11行　相楽郡　ルビ　さがらのこおり→さがらかぐん

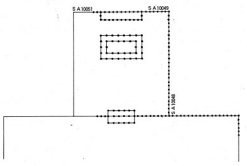
249頁18行　相楽別業　ルビ　さがらのべつぎょう→さがらかのべつぎょう

249頁図キャプション　恭仁京大極殿跡→恭仁宮大極殿跡

250頁図右キャプション追加　（奈良文化財研究所『日中古代都城図録』より）

250図左下キャプション　平城京から移された中央区の大極殿はのちにこの山城国国分寺に施入された。→山城国分寺塔跡。平城京から移された中央区の大極殿はのちにこの山城国国分寺に施入された。





251頁20行　重弧文→重郭文

253頁11行　なにかの類例といった感じがしなかった。→歌木簡として一般化できるようには思えなかった。

265頁16行　第二章で→第五章第三節で

266頁図左　（249頁と重複のため削除）

267頁内裏変遷図右　右下図に差し替え。

地図キャプション　西が役所の事務部門→中央区画はさらに二つに分かれ、西が役所の事務部門

278頁▼18　調副と→調副物と

281頁19行　「〔割　二籠カ〕」→「〔割　二籠カ〕□□□□」

282頁6行　欠かれていた→書かれていた

285頁図の赤の網掛け　建物に網かけしているのは誤り

285頁15行　ＳＫ八二〇はどこの役所のゴミ捨て穴か？→平城宮の官庁街、木簡から推理するのは一苦労

287頁8行　一が違った→位置が違った

287頁9行　「一門」「二門」「三門」「東」がつく。→「一門」「二門」「三門」には「東」がつく。

291頁7行　連座して廃され、淡路国に流された→ともなって廃され、淡路国に移された

292頁図キャプション　南西済み→南西隅

295 頁上段地図キャプション　平城京遷都→平城京還都
提供・奈良文化財研究所→提供・奈良県立橿原考古学研究所
299 頁22行　には、→（削除）
299 頁上段地図キャプション　銅槐→銅塊（二ヵ所あり）
301 頁▼26　漢和辞典→百科辞典
303 頁10行　▼28→11行「認められている。」の後に移動。

第七章　奈良の都の終焉、あるいは律令国家完成への道

309 頁柱　奈良の都の終焉、あるいは律令国家の第一到達点→奈良の都の終焉、あるいは律令国家完成への道
312 頁最終行　7-7に相当する木簡の写真欠。
313 頁2行　宮城門は→宮城の諸門は
313 頁3行　中門（宮門）は兵衛府だった。→中門（宮門）は衛門府と衛士府、内門（閤門）は兵衛府だった。
316 頁13行　連座したとして→ともなって
323 頁1行　斎曾→斎會
323 頁12行　女婿→息子の嫁
325 頁下段キャプション　東大寺大仏開眼一二五〇年慶賀大法要のようす→東大寺法華堂の執金剛神
326 頁15行　太上大臣→太政大臣
327 頁上段地図のキャプション　下記に差し替え
→平城宮南面西門若犬養門。門前の二条大路の北側溝から公子部牛主の馬の捜索願の木簡がみつかった。
330 頁下段右図　ＳＫ２１９の色塗り誤り
332 頁10行　北宮→北京
340 頁▼30　現場指揮官→第四等官
341 頁2行　諡号→尊号
341 頁3行　諡号→尊号
341 頁15行　文武、元明、元正、聖武、淳仁→元正、聖武、淳仁、光仁、桓武
342 頁下段図　法王宮が建っていた場所を望む。→称徳天皇の大嘗宮のイメージ（現地説明会資料より）。
349 頁9行　七六八年一月→七六八年十月
351 頁下段写真7-15　重複により削除
352 頁下段写真キャプション　欠→7-15
354 頁13行　井上内親王→井上内親王▼41
354 頁15行　下図（脱落）
356 頁2行　東区朝堂院（第二次朝堂院）南門→東区朝堂院東門
356 頁3行　その南にある→（削除）
357 頁16行　東区朝堂院（第二次朝堂院）→東区朝堂院
360 頁18行　内豎省の統括と→内豎省（内豎の統括と
361 頁5行　「弁官の→弁官の
361 頁14行　あたるじつは→あたる。じつは
362 頁1行　第八節タイトル　フォント・ポイント不正
363 頁4行　「叅」→「叅」
363 頁6行　「叅」→「叅」
364 頁3行　下に掲げた→左頁上段に掲げた

平城京人名索引

1行　平城京人名索引→平城京人名録
左記の項目を削除

阿児奈波、香椎廟、郡家、高御坐、橘夫人念持仏、藤原宮、藤原京、問民苦使、若翁

塩焼王（永上塩焼）→塩焼王（氷上塩焼）

掲載木簡索引

4-28 出典　平城木簡概報 29-19→平城木簡概報 29-9

6-29 出典　平城京木簡 4-4688→平城宮木簡 4-4668

7-4 人名　公子部牛主→（削除）

7-5 人名　竹波命婦（壬生直小家主女）→（削除）

7-6 人名　神浄成　大伴総道　□浄人　他田広万呂　秦弥竹　秦弥
→（削除）

7-7 人名　武　金刺池主　大伴広□　物部広　大□□国　錦部家□
→（削除）

7-8 人名　池田□万呂　大伴子□　神浄□→公子部牛主

7-9 人名　三嶋　美努連　□日佐□　秦忌寸　秦忌寸田次　茨〈〉
→竹波命婦（壬生直小家主女）

7-10 人名　□得　河内〈〉　□綱　錦〈〉　□□　高橋連稲　勝部連□　今木連　黄文連　出雲□□　飽浪連　鴨祢疑　六人部連□
→神浄成　大伴総道　□浄人　他田広万呂　秦弥竹　秦弥武金刺池主　大伴広□　物部広　大□□国　錦部家□　池田□万呂　大伴子□　神浄□

7-11 人名　添石前　石上朝臣（宅嗣）
→三嶋　美努連　□日佐□　秦忌寸　秦忌寸田次　茨〈〉
□得　河内〈〉　□綱　錦〈〉　□□　高橋連稲　勝部連
□　今木連　黄文連　出雲□□　飽浪連　鴨祢疑　六人部連
□

7-12 人名　（空欄）→添石前

7-14 人名　秦福貴麻呂麿　私船守　小長谷麻呂→石上朝臣（宅嗣）

7-15 人名　宮部名足　伊部諸国　礒部石足→（削除）

7-16 人名　（空欄）→秦福貴麻呂　私船守　小長谷麻呂

7-17 人名　（空欄）→宮部名足　伊部諸国　礒部石足

7-18 人名　栗前福足　三嶋大調　賀陽氏継→（削除）

7-20 人名　酒部宅継　林浦海

7-21 人名　武生三継→安倍庭女　都努稗田　石川尾張　安倍藤子
勝安麻呂　阿閑

7-22 人名　安倍　三嶋大調→栗前福足　三嶋大調　賀陽氏継

7-23 人名　（空欄）→酒部宅継　林浦海

7-24 人名　（空欄）→武生三継

7-25 人名　（空欄）→安倍　三嶋大調

木簡の世界への誘い

上段22行　出土下木簡→出土した木簡

下段最終行　教育者→教育社

※右記は恐らくほんの氷山の一角であり、誤りは他にも多々発生しているのではないかと危惧いたします。頭注（▼の掲載頁がずれているもの。註そのものの重複や付ける位置の悪いもの）の不備や、本来理解を助けるために掲載するはずだった図の欠落など、読者の便を考えると不親切な部分も多々生じていますが、煩瑣になるため正誤表からは割愛したことをお詫びします。

（作成　渡辺晃宏）